

取材のお願い

公益財団法人古川知足会古川美術館

爲三郎記念館特別展

「形の素2022 – 赤木明登・内田鋼一・長谷川竹次郎の古物コレクション展」

2022年10月22日（土）～12月18日（日）



©Shizuka Suzuki

展覧会のご案内

各位

平素は格別のご厚情を賜りありがとうございます。

この度、工芸家、赤木明登氏、内田鋼一氏、長谷川竹次郎氏のコレクションを紹介する特別展「形の素2022 – 赤木明登・内田鋼一・長谷川竹次郎の古物コレクション展」を爲三郎記念館にて開催します。

漆、陶芸、金工とそれぞれの分野の第一線で活躍する三人の作り手のコレクションを通じ作家の形の素に迫ります。是非とも貴媒体にてご紹介いただきたく、お願い申し上げます。

形の素とは・・・

2014年、塗師の赤木明登の発案で、鍛金師・長谷川竹次郎と陶芸家・内田鋼一が自ら収集した古物コレクションを、美しい写真と自筆のエッセイからなる一冊の本で記録しました。（美術出版社刊行『形の素』）

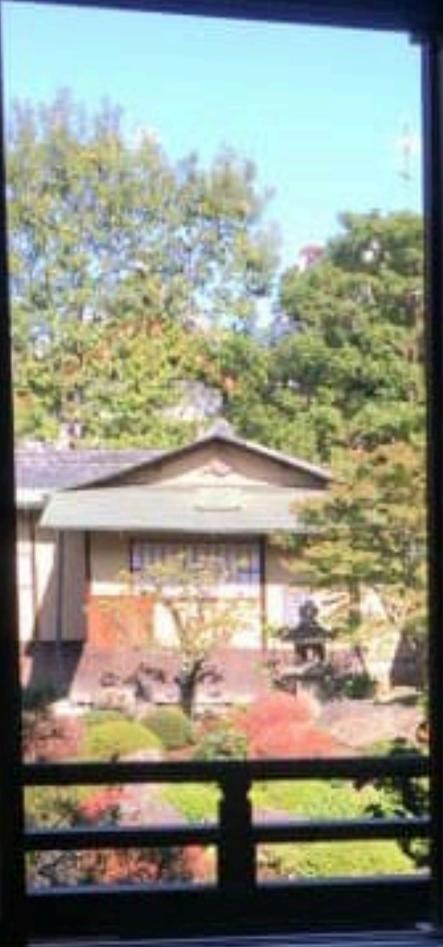
この著書がきっかけとなり、三人はコレクションによる展覧会を2017年に富山・樂翠亭美術館で、2019年は京都の建仁寺で開催してきました。

コレクションへの作者の想いを率直に伝えた展覧会は、来場者より「作者のものづくりの原点をみた」と高い支持を得ました。

そして2022年、三回目となる「形の素」展を昭和の香りを色濃く残す数寄屋建築・爲三郎記念館で開催します。

作者が無意識のうちに手に取り、美しいと感じる古物から彼らの形の源流を紐解きます。





古物コレクション

三人の古物コレクションは制作年代と地域、素材と形状が多種多様です。塗師の赤木はおのずと塗物が多く、内田はやきもの。そして長谷川は装飾品を中心になもの。彼らはそのものに惹かれ、見つめたり愛でたりすることによって作家としての感性を構築してきました。そしてその経験は彼らのつくりだすものの「形の素」となっているかもしれません。

形の源流 「形の素」2014年美術出版発行より抜粋

-----塗師・赤木明登-----

色々なものを見てきて身体にインプットした作り手が、自分の中で消化して作品としてアウトプットする。それは作り手の感情や思考が主体となって物を作っているのではなく、過去から未来への物の連鎖、進化の流れの中、今現在の物を自分が作らされている。

-----陶芸家・内田鋼一-----

ものを見ながら、これはどうやってつくったんだろうと想像をするよね。道具も窯もない時代に、どんな道具を使って温度をどう調整して作ったんだろうって。そういったことも俺の「形の素」になっているよ。フォームではなくて技術的なことで。

-----鍛金師・長谷川竹次郎-----

手に入れて楽しんで、一度自分の中に吸収してしばらくしてから、、みているうちにこの形がいいんじゃないか、と自分の作品の参考にさせてもらうことがあります。

爲三郎記念館と古物

一回目の展覧会はホワイトキューブと和風建築、庭園が美しい富山の樂翠亭美術館で開催されました。二回目は格調高い京都建仁寺塔頭兩足院の静寂な空間での展覧会でした。

三回目となる爲三郎記念館は、その二つとは異なる魅力を持っています。それは古物コレクションと同様に、いくつもの時代の中で「人々の生活」に寄り添いながら現在につながっていること。本来あるべき古物の姿を堪能できる空間かもしれません。

コレクションへの想い上映会

爲三郎記念館では、作者のコレクションへの想いを編集したトーク動画を以下の日程で放映します。

日時：2022年11月4日（金）～12月2日（金）

場所：爲三郎記念館「桜の間」

備考：11月17日と12月1日はお茶席のため上映中止

特別講演会

武者小路千家官休庵家元後嗣

千宗屋氏による古物のところ—三人のコレクションより—

出品作家とも交流を持つ千宗屋氏が、古物愛好家の目線で3人のコレクションを語ります。

日時 | 11月13日（日） 14:00～15:30

定員 | 100名

料金 | 1,500円（別途2館共通入館券必要）

場所 | ルブラ王山（古川美術館から徒歩5分）

申込 | 古川美術館（電話・フロント）



赤木明登

AKAGI Akito



©Shizuka Suzuki

内田鋼一

UCHIDA Koichi



©Shizuka Suzuki

赤木明登

漆芸家。一九六二年岡山県生まれ。中央大学文学部哲学科卒業後、編集者を経て、八十九年輪島塗下地職人・岡本進に弟子入り。九十四年独立。現代の暮らしに息づく生活漆器

「ぬりもの」の世界を切り拓く。主な著書に『美しいもの』『美しいこと』『名前のない道』（新潮社）がある。

赤木明登コレクション

「輪島塗飯椀」©Shizuka Suzuki

伝統的な輪島塗の椀には、このようなたっぶりとした深さがある。よい漆には、内側から膨らんできたような張りがある。まだこの椀はいきているのだ。掌に載せて目を閉じると、この椀を手にしたであろう幾世代かの人々のざわめきが聞こえてきた。椀が静かに語りかけてきた。「わたしの形をあなたの血肉としなさい」と。

『形の素』2014年美術出版社発行P4より

内田鋼一

陶芸家。一九六九年愛知県生まれ。愛知県立瀬戸窯業高等学校陶芸専攻科修了後、東南アジアや欧米、アフリカ、オーストラリアなど世界各国の窯場に住み込み修業を重ねた後、九二年三重県四日市市に窯場を構え独立。国内外で精力的に発表。著書に『MADE IN JAPAN』（アノニマスタジオ）がある。

内田鋼一コレクション

「ガラス碗」©Shizuka Suzuki

一番最初に手にした時のスーッと掌に収まる感じを、今でもはっきりと覚えている……。土の中で長い間埋もれ、時を経過し、風化して、少しの衝撃で崩れてしまうくらいぼろぼろになっている。表面も透明感は失われ、一見、ガラスとは思えないのだが、むしろ透光性が失わせているぶん、そのフォルムの美しさがより際立っている。

このガラス碗は自分が昔からずっとつくりつづけている《White Bowl》のフォルム、質感、イメージの原形ともなっている。

『形の素』2014年美術出版社発行P56より



長谷川竹次郎

鍛金師。一九五〇年生まれ。尾張徳川家の御用鑄師の家系で、明治より茶道具金工家として一望齋を名乗る、二代目長谷川一望齋春泉の次男として生まれる。六八年人間国宝・故関谷四郎氏に鍛金を師事。九四年、三代目一望齋春洸を襲名。著書に『父の有り難う』（主婦と生活社）がある。

長谷川竹次郎コレクション

「蟬形含玉」©Shizuka Suzuki

こうしてみると何千年も前の職人たちの手の温もりと、息づかいが伝わってくる。先人たちの知恵と想像力は今もって斬新であり、私の背を正してくれる。これは死者（王様）の口に含ませた副葬品。一説には不老不死の仙人になれるよう、地中から羽化して空へ飛んでいく蟬にあやかろうとしたのではとも言われている。柔らかくしっとりとし、造形もおおらかで、何とも手中に収まる一点。古代中国では権力者が死ぬと玉衣で全身を覆い、鼻や耳なども栓をして、気を身体から出さないようにしたという。

『形の素』2014年美術出版社発行P108より

展覧会情報

爲三郎記念館特別展

「形の素2022—赤木明登・内田鋼一・長谷川竹次郎の古物コレクション展—」

会 期：2022年10月22日（金）～12月18日（日） 10：00～17：00（入館は30分前まで）月曜休館

主 催：公益財団法人 古川知足会

協 賛：SMBC日興証券

後 援：愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、中日新聞社、CBCテレビ
スターキャットケーブル・ネットワーク株式会社

料 金：大人1,000円 高・大学生500円 中学生以下無料

【お問い合わせ】

公益財団法人 古川知足会 古川美術館・分館 爲三郎記念館

電話 052-763-1991 F A X 052-763-1994(学芸課)

〒464-0066 名古屋市千種区池下町2丁目50番地

担当学芸員 林奈美恵 (n_hayashi@furukawa-museum.or.jp)